台大日本語文研究第 44 期
2022 年 12 月，頁 67-89
2022-09-30 收稿，2022-11-28 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 202212_(44).0004

「台灣歌壇」詠歌中所見之日本文學、文化的影響：以 2015 年「台灣歌壇」之後的台灣人會員的詠歌作品為研究對象

中村祥子*

摘要

台灣有著以日語進行的韻文創作活動。創作作品有短歌、俳句、川柳等。「台灣歌壇」用日語創作短歌，之後透過和歌歌人大岡信，將作品介紹給日本的和歌歌壇，1994 年日本出版『台灣萬葉集』後，台灣的創作和歌也開始受到日本和歌歌壇矚目。在那之後，台日兩地在考察「台灣歌壇」創作的韻文作品後，發現多從以下角度出發：台灣「日語世代」的人們對日語的鄉愁、對「皇民化」時期的矛盾情感。

但「短歌」是一種用日語呈現的文學創作，僅從日語世代、皇民化的角度來看「台灣歌壇」所產生的「短歌」未免有所偏見，僅以此觀點來鑑賞韻文作品未免值得商榷。這些韻文應視為台灣韻文作品的影響過程(如台灣的中國詩歌等)，或是日本文學影響過程當中之一環，作為「短歌」重新審視。此外，在台灣文學史當中，也必須把此類韻文重新定位。可以藉由將「台灣歌壇」當中歌詠韻文之人的文學背景和主題，作為「重新思考台灣短歌定位」的思考點。

關鍵詞：台灣歌壇、日本語世代、日本文學、包容、韻文

* 輔仁大學日本語文學系副教授

臺灣大學學術期刊資料庫

The Tolerance of Japanese Literature and Culture in the "TAIWAN KADAN" : A study of the TANKA after the "TAIWAN KADAN" in 2015

NAKAMURA Shoko*

Abstract

There are Japanese rhymes written in Taiwan, including TANKA, HAIKU, and SENRYU. Works in "TAIWAN KADAN" were written in Japanese, which have become the spotlight in TANKA of Japan through the introduction by the TANKA poet Makoto Oka, especially after the publication of "Taiwan Manyoushu" in 1994.

it is easy to find the feelings of homesickness of the Japanese language generation towards their nostalgia for the Japanese language and the Japan era of "The Kominka".

However, the "TANKA" are literary creations in Japanese, and I have doubts about using only the viewpoint of the Japanese language generation and " Japanization " to evaluate the " TANKA " produced by the " TAIWAN KADAN " and to appreciate the rhymes from this viewpoint. The rhymes seen here should be reexamined as " TANKA " as part of the history of the reception of rhymes in Taiwan (e.g., Chinese poetry) or as part of the history of the inclusion of Japanese literature. In addition, such rhymed works must be reconsidered as literary works in the history of Taiwanese literature.

* Associate Professor, Department of Japanese Language and Culture, Fujen University

臺灣大學學術期刊資料庫

Key words: TAIWAN KADAN, Japanese language generation, Japanese literature, tolerance, rhyme

臺灣大學學術期刊資料庫

「台湾歌壇」詠歌に見る日本文学・文化の受容
—2015 年以降の「台湾歌壇」台湾人会員の詠歌を対象に

中村祥子*

要旨

台湾では日本語による韻文の創作活動が見られる。短歌、俳句、川柳などの創作活動が行われている。「台湾歌壇」は日本語で短歌を創作する活動を行っている。歌人大岡信により日本へ紹介され、1994年に日本で出版された『台湾万葉集』によって、注目されるようになった。その後、日台における「台湾歌壇」の歌への考察は、日本語世代の人々の日本語への郷愁、「皇民化」を行った日本時代に対するアンビバレントな感情を詠んでいるものという切り口から捉えるものが多い。

だが、「短歌」は日本語を用いた文芸である。「台湾歌壇」という場所で生み出された「短歌」を日本語世代、皇民化という視点のみでバイアスをかけ、歌を鑑賞することには疑問を感じる。ここで読まれた歌は、台湾における漢詩を含む韻文受容史、日本文学受容史のなかに位置付け、「短歌」として読みなおす必要がある。同時に台湾の文学史の中に文芸として位置づけなおす必要があるのではないか。これは「台湾歌壇」で歌を詠む人の文学的背景とテーマを考えることによって、台湾での短歌の位置づけを考える手がかりとなる。

キーワード：台湾歌壇、日本語世代、日本文学、受容、韻文

* 輔仁大学日本語文学系准教授

臺灣大學學術期刊資料庫

「台湾歌壇」詠歌に見る日本文学・文化の受容
—2015年以降の「台湾歌壇」台湾人会員の詠歌を対象に

中村祥子

一、はじめに

2021年7月台湾大学日本語文学科卒業の李琴峰が、第165回芥川賞を受賞した。芥川賞は日本文学の可能性に対して贈られる新人文学賞である。その賞に、外国語として日本語を習得した人から生み出された文学作品が選ばれた意味は大きい。李琴峰は「日本語で表現すること」を選びとって文学作品を創作しているわけだが、では、日本語による文学・文芸の世界とはなんだろうか。文学・文芸表現をする言語として日本語を選び取ることからは、日本語の表現の可能性以外に、日本語という言語が持つ文芸性や日本語によってより多く語り得るものとはなにか、という問いが発せられている。

台湾という地は、日本語を「国語」として取得した経験をもつ。また、終戦後「日本語世代」として日本語を生活や表現の言語とする人々（すでに逝去している者も多い）を主としたメンバーとする「日本語」を用いた文芸活動が行われている地でもある。漢詩（鑑賞や作詩以外に台湾語での吟詠も行う）の創作の傍ら、日本語で「俳句」「川柳」「短歌」を詠む文学・文芸活動が行われている[1]。これらは「日本語」を選び取って文芸活動をしているわけだが、日本語で書くことを選択した文芸活動は、日本文学のどのような可能性を拓いたのか。

特に、台湾という地で日本語で書くことを選び取った文芸である「台湾歌壇」の詠歌が語り得たものは何か。また、日本文学の中ではどのような位置づけができるのだろうか。問い直してみたい。

周知のように、「台湾歌壇（台北歌壇）[2]」は1968年に、医師であり

[1] 台湾歌壇の会員は、台湾俳句会、台湾川柳会ともに所属している者が多い。
[2] 「台湾歌壇」は1968年に「台北歌壇」として第一号が刊行された。2003年

臺灣大學圖書館期刊資料庫

歌人であった呉建堂によって台湾で創設された短歌会であり、日本語世代の人々が中心になって構成されている。ここでの詠歌は呉自身の手によって、1981 年に『花をこぼして』、1988 年に『台湾万葉集　中巻』、1993 年に『台湾万葉集　下巻』としてまとめられ台湾で刊行された。この『台湾万葉集　下巻』が大岡信に寄贈され、その中の詠歌が「折々の歌」で紹介されたことがきっかけとなり、1994 年日本で集英社より『台湾万葉集』として出版された。当時、台湾国内には短歌のサークルのような集まりがいくつもあったというが[3]、日本版が出版されるという経緯によって日本で「台湾歌壇」が知られるようになる。「台湾歌壇」の歌への考察は、「日本語世代の人々の日本語郷愁」、「皇民化」を行った日本時代に対するアンビバレントな感情を詠んでいるという切り口から語られがちである。

呉建堂主宰との往復書簡を交わし、台湾歌壇の短歌を日本語教育の成果として位置づけた河路由佳（2000）[4]は、台湾歌壇の歌を「日本語教育で育った台湾人の人間群像」（p62）、「戦前の「国語」教育における短歌教育の反映」（p62）と位置付ける。確かに戦前の「国語」教育の成果という角度から見ると、戦前に呉建堂主宰始め、台湾歌壇に参集した会員が短歌という文芸形式を選び取ることはなかっただろう。また、磯田一雄（2013）[5]は、台湾歌人が「皇民化教育」の一環としての短歌教育を通して、その流れで台湾歌人が生まれたとする。また、台湾歌壇の会員であった蘇楠榮（2018 年退会）の歌集『南島に息吹く』（戦前、戦後の詠歌をまとめたもの）を取り上げる。皇民、戦後一時期を経て再度歌を詠み始める経緯と詠歌の中に、短歌という表現形式を選ぶ表現主体が経てきた時代背景や歌の特色

に、台湾正名運動を受け、歌会の名称および歌集を「台湾歌壇」とした。

3 台湾歌壇会員の林聿修氏による直話。林聿修氏は、「さんご」に掲載された呉建堂氏のエッセイを読んだことがきっかけとなり 1979 年に入会。呉建堂主宰が台中や彰化、南部での歌会を行う時は会場の手配や連絡などをして「台北歌壇」を支え、現在も歌会に参加している。1930 年生。

4 河路由佳(2000)「日本統治下の台湾における日本語教育と短歌―孤蓬万里編著『台湾万葉集』の考察」『人間と社会』第 11 号、p.47-64、東京農工大学

5 磯田一雄（2013）「植民地教育史と台湾歌人」『天理台湾学報』第 22 号、p.1-34、天理台湾学会

臺灣大學學術典藏庫

を述べる。また、皇民化期に短歌教育を受けたものは、戦後短歌に帰ってくることはなかったと指摘している。

実際に論者自身が「台湾歌壇」の会員になり、歌壇の会員と詠歌や歌評などを通して言葉を交わす機会を得ると異なった景色があるように思える。

「短歌」は日本語を用いた文芸である。「台湾歌壇」という場所で生み出された「短歌」を「日本語世代の人々の日本語郷愁」、「皇民化」という視点でのみバイアスをかけ、それを鑑賞することには疑問を感じる。ここで読まれた歌は、台湾における漢詩を含む韻文受容史、日本文学受容史のなかに位置付けて、「短歌」として読みなおしてみる必要があるのではないだろうか。同時に、台湾の文学史の中に文芸として位置づけなおす必要があるのではないか。「台湾歌壇」を位置づけをする初動として、台湾歌壇の日本語世代を含む台湾人会員の文学的素養を形作っている文学・文芸（主として日本文学）を明らかにしてみたい。まずは、台湾歌壇の会員の詠歌の中から「短歌」や「短歌・詠歌に対する態度」を概観し、「短歌」に対する態度を明確にしたうえで、詠歌の中にみられる文学・文芸を通して、台湾歌壇台湾人会員の文学・文芸の受容について考察していく。「台湾歌壇」で歌を詠む人の文学・文化的背景とテーマを考えることは、台湾での短歌の姿と短歌史、加えて台湾文学史の位置付けの手がかりとなろう。

本論では、まず歌集の形を紹介し、その中の実作の世界から、「歌への態度」と文化・文芸の受容という面から詠歌に引用される「文学・文化」を見る。

考察の対象は、詠歌は年に二回まとめられる歌集「台湾歌壇」とする。期間は、「台北歌壇」時代から数えて「台湾歌壇」創設 50 周年を基準とし、創設 50 周年前の一年半前から五年後までの期間を対象とする[6]。歌集の号数でいうと第 23 集（2015 年 7 月出版）～第

[6] この区分については別稿としてまとめる。「台湾歌壇」は大きな流れとして以下のように区分できると考える。「台湾歌壇（台北歌壇）」を四つの時期に分

臺灣人文研究學術期刊資料庫

35 集（2022 年 2 月出版）となる。また対象とする詠歌は、台湾の台湾人会員（日本語世代以後の会員も含む）のみにする。この中から「短歌」に対する態度と歌の中に引用されたり詠み込まれる文学・文芸作品や歌や芸能に関わるものを見ることにする。

なお、対象を台湾歌壇 50 周年を境に設定したのは、短歌とは、消えることのなかった「台湾における日本文学の遺産」として「一九六〇年代が後期に差しかかる頃、日本語で教育を受けた世代の間で短歌形式のリバイバル」が行われた[7]ものであるならば、「リバイバル」した文学が 50 年経ちどのように定着したのかをみることができると考えるからである。また、調査の対象を 50 周年の詠歌からではなく、その一年半まえからの、50 周年記念を挟んでの 7 年間を対象にしたのは以下の理由からである。一つは、50 周年のことが頻繁に話題となり、50 周年へ向けて歌会への機運が高まる雰囲気に包まれていたことがある。同時に、歌壇で呉建堂主宰が逝去後歌壇を続けてきた会員が欠け始めた状態だったことがある。もう一つは、50 周年を境に日本語世代の台湾人会員が退会をしたり、記念を行った年の 7 月に歌壇蔡焜燦代表の逝去によって在日日本人会員が退会したことがある。これらの状況を受けて「台湾歌壇」の人数や会員構成が少なからず形を変えたが、同時に歌を詠むという行為が意識化された時期である。よって、50 周年を挟んだ時期設定とした。

二、「台湾歌壇」歌集について

まず、対象とする歌集「台湾歌壇」の出詠者の構成を確認しておく。歌集には、会員による作品（十二首詠として十二首の作品を提出したもの）が掲載される。その出詠者の構成は以下のとおりである。

けておきたい。創設（1968）～台湾万葉集（1987）まで　台湾万葉集後（1988）～呉建堂代表逝去（1998）まで　呉代表逝去後（1999）～歌壇創設 50 周年（2017）まで　歌壇創設 50 周年後（2018）～現在。

7 フェイ・阮・クリーマン著　林ゆう子訳（2007）『大日本帝国のクレオール』「序　ポストコロニアルの屈折」、p4、慶應義塾大学出版会

臺灣人文學術資料庫

【各集十二首詠　出詠者数及び構成内訳】

巻数	出版年	十二首詠出詠者数（台湾人・在台日本人・在台非日本人・在日日本人）
第二十三号（呉建堂創刊 160 輯）	2015 年 7 月	67 名（42 名・7 名・1 名・18 名）
第二十四号（呉建堂創刊 161 輯）	2015 年 1 月	69 名（41 名・4 名・1 名・23 名）
第二十五号（呉建堂創刊 162 輯）	2016 年 7 月	56 名（35 名・4 名・1 名・17 名）
第二十六号（呉建堂創刊 163 輯） 創立 50 周年記念号	2017 年 4 月	99 名（62 名・5 名・1 名・31 名） 元会員 75 名（台湾人 59 名　日本人 16 名） 故人 31 名（台湾人 30 名　日本人 1 名）
第二十七号（呉建堂創刊 164 輯）	2018 年 1 月	61 名（36 名・4 名・1 名・20 名）
第二十八号（呉建堂創刊 165 輯）	2018 年 7 月	56 名（30 名・5 名・1 名・20 名）
第二十九号（呉建堂創刊 166 輯）	2019 年 1 月	52 名（30 名・6 名・1 名・15 名）
第三十号（呉建堂創刊 167 輯）	2019 年 7 月	55 名（29 名・ 7 名・0 名・19 名）
第三十一号（呉建堂創刊 168 輯）	2020 年 2 月	46 名（23 名・4 名・0 名・19 名）
第三十二号（呉建堂創刊 169 輯）	2020 年 8 月	48 名（23 名・6 名・0 名・19 名）
第三十三号（呉建堂創刊 170 輯）	2021 年 2 月	43 名（21 名・6 名・0 名・16 名）

臺灣大學學術期刊資料庫

第三十四号（呉建堂創刊 171 輯）	2021 年 8 月	40 名（20 名・7 名・0 名・13 名）
第三十五号（呉建堂創刊 172 輯）	2022 年 2 月	40 名（21 名・5 名・0 名・14 名）

50 周年を境に、会員の高齢化や蔡焜燦氏の逝去の影響による在日日本人会員の減少を受け全体の出詠者は減っているが、歌集に収録されているのは、例会に詠草を寄せる固定会員のものが主である。歌の内容は、会員の方の日常生活のなかで出会ったこと、感想、感慨が日記のように書かれている。このような詠歌の態度に対しては大方の日本の歌人に「日本の短歌がここ百年の歴史を閲する間にとうに脱ぎ捨ててきたはずの､素朴な写実短歌､でなければ生活報告」と評されていることが大岡信によって語られている[8]。同時に台湾短歌の、短歌形式に遊ぶ楽しさや、機智、諧謔、皮肉なまなざしが特徴として挙げられ、「人生を客観視する逞しさ」「明るい諦念のようなものに達した」ものが「台湾短歌」だとされている。では､『台湾万葉集』日本出版後、28 年を経た現在の短歌に対する意識はどのようなものだろうか。

三、短歌に対する態度と日本文学文化の受容

歌に対する態度を実作の中からみていく。台湾歌壇の歌に対する態度を象徴する歌として、呉建堂代表の以下の二首が象徴的に繰り返し取り上げられている。

日本語のすでに滅びし国に住み短歌詠み継げる人や幾人

万葉の流れこの地に留めむと生命のかぎり短歌詠みゆかむ

前者「日本語の…」は呉主宰自身の、この地で消えゆく運命にある日本語によって生きるという決意が歌われている。日本語によって生きるとは、日本的思想を継承することではない。第四句に「短歌詠み継げる」とあるように､「短歌」という形式による表現を継承

[8] 孤蓬万里編（1994）『台湾万葉集』序文、p4、集英社

臺灣大學學術期刊資料庫

していこうとしている。継続するのは日本的思想でなく、日本語の形式を借り、自己の文学的情操を容れるものとして短歌という形式に依ろうとしている。呉建堂主宰を始め、台湾歌壇で歌を読み継ぐ人々の日本語は、形式を借りた文学表現法を用い、より効果的に文学的表現が行える言語に過ぎない[9]。つまり、台湾で短歌を作る基本立脚点の表明として、短歌とは日本的思想の体現ではなく、感情の容れ物としての言語と形式だというのがこの歌の核にあるのだろう。呉建堂主宰は、終戦後の台湾における日本語と台湾での日本文学受容の状況と自らの心情を次のように述べる。

> 戦後台湾から日本人が引き揚げると、日常生活から日本語は急速に消えていった。(中略) 文学どころではない真空状態が十年ほど続く。中国文學が漸次庶民に及び、漢詩などは隆盛の一途を辿った。
>
> 然し一個人にとっては、幼少の頃に覚えた言語は、その思想形成に最も影響が大きい。台湾生まれの中国人（即ち当時の本島人、現在の本省人）で、現在五十五歳以上の人たちにとって、日本語は、一生の中で最も自分の情操生活に寄与する言語になってしまった。二十歳前後になって学んだ中国語（北京語）は、どうしても文学的素養になるには、質量共に不足である。[10]
>
> 一九五五（昭和三〇年）頃から、「文学に国境はなし」という言葉を盾に取り「短い一生のこと、今更中国文学に深入りして苦労を重ねるよりは、外国文学として日本文学をやってゆくに如かず」という気風が生まれている。だが小説、戯曲は複雑で時間もかかるし、手っ取り早くアマチュアとしてやれる短文学に目がつけられた。日本在住の昔の恩師や友人をつてに、短歌や俳句、川柳の結社に入り、あるいは大衆雑誌の文芸欄に投稿するのが現れる。[11]

---

[9] 孤蓬万里編（1994）、p9、『台湾万葉集』序文、集英社
[10] 孤蓬萬里（1993）「台湾の短歌の近況について」『ふぉるもさ』1993年春季号、p43、台湾文化研究会
[11] 同上。孤蓬萬里（1993）「台湾の短歌の近況について」『ふぉるもさ』1993

臺灣大學學術期刊資料庫

日本語は「情操生活に寄与する言語」である。そこから生み出された感性、感情を表現するために容れることができるのは「手っ取り早くアマチュアとしてやれる短文学」で、「短歌」「俳句」「川柳」であった。呉建堂主宰のような言語教育の背景を持つ人々にとっては、中国語が「文学的素養になるには質量とも不足」だったため、＜表現＞をする言語は日本語が選ばれた。選ばれたというと、現在日本語で創作を続ける非日本語母語話者の創作活動のように意志を持ってその言語を使おうという態度のようであるが、実はやや消極的な選択であったのではないか。心の中で動く情操という感情（あるいは感動）の表出を言語的に洗練させ、一つの表現として客観的に捉え人に伝えうる文学的な言語は、日本語でしかない状況であったことにも注意しておきたい。そのなかで「短歌」によって自らの情操生活を支えよう、という呉建堂主宰（と共に短歌を詠んでいた会員）の現状と決意が前者の「日本語のすでに滅びし」の歌であったのだろう。

下句「歌詠み継げる人や幾人」には、「情操生活に寄与する言語」もやがて消えゆくものだという諦念を読み取ることができるかもしれない。だが、消えゆくものであるからこそ、短歌形式という容れ物に入れて残して行こうとする決意とも読める。この歌の中に、消えゆくものを負う諦念と継承していこうという決意の揺らぎが読み取れる。

後者「万葉の…」は自分の文学の位置づけを示したものである。該歌の上句「万葉の流れこの地にとどめんと」は、この歌壇で詠む継がれる歌は、万葉集の流れの中にあるという確認である。ただ、取り上げれらることは稀だが、呉建堂主宰は『台湾万葉集』の序文に台湾短歌について次のような歌を残している。日本の歌人たちの台湾の歌の傾向は古いという批判を受け入れた上で「日本人は新しいものをしきりに求める。しかし、古いものは尊い。もっと古いも

年春季号、p.43、台湾文化研究会

臺灣大學學術期刊資料庫

のを大切にしたもいいのではなかろうか？」[12]と言う。そして次のような歌で序を締めくくる。

古きよきもの保ちつつ新しきものを求めん短歌の道にも

台湾の短歌とは「古きよきもの」に甘えているのではなく、「異国の文芸（ふみ）」[13]である「短歌」形式であっても「新しきものを求めん」とするものだと言う。異国の文芸に新しいものを吹き込もうとする意欲が示されている。呉氏が「五十年を領台した日本人にとって慰めというべきは、そのこぼしていった短詩型文学の花びらが、埋もれることなく芽を萌えやし生いついで来たことだろう」[14]ともいうように、呉氏の「文芸」を引き継ぐという意識は、現在の歌壇の中にも受け継がれているようである。

1　台湾にて何故に和歌を詠むかと問はるれば異国のものも文芸なればと
（顔雲鴻 2016 年 1 月南部歌会詠草「第 25 号」p161 所収）

2　ひたすらに学ぶ短歌に文芸味あぢはるるが楽しかりけり
（顔雲鴻「第 33 号」p9 十二首詠「海ゆかば」2021 年 2 月）

3　日本語のうつくしき響き歌に詠む態をくずさず時流におぼれず
（游細幼「第 23 号」p117「第 22 号」5 月詠草の歌評より 2015 年 7 月）

4　この美しき言の葉詠みのなかりせば老いの寂寞如何にせむか
（林肇基「第 32 号」p48 十二首詠「歌あればこそ」2020 年 8 月）

5　昭和生まれ平成に生き令和にと生つきてまた和歌に生きぬく
（林碧宮「第 32 号」p49 十二首詠「和歌に生き抜く」2020 年 8 月）

顔雲鴻が 1、2 で詠うように、「文芸」意識のもとに詠歌に向かいあっている。日本語のまた、3 の游細幼「日本語の美しき響き歌に

[12] 孤蓬万里編（1994）、p.11、『台湾万葉集』序文 集英社
[13] 孤蓬万里編（1994）、p.11、『台湾万葉集』序文 呉建堂主宰の歌
短歌とふいのちのかぎり詠みつがむ異国の文芸と人笑ふとも
[14] 孤蓬万里（1994）『「台湾万葉集」物語』、岩波書店、p.59

臺灣文學資料庫

詠む」4 林肇基「この美しき言の葉詠み」と言葉の響生き抜く」という句の中には、日本語という言語と短歌の形式によって、日本語の文芸作品を作るという意識がみられるのではないだろうか。ことに「昭和」「平成」「令和」という年号をこの文芸としての短歌に取り組もうという意識は、歌集の根幹をなす十二首詠の題にもみられる。一部を挙げよう。

「くさぐさの歌」(蘇楠榮)/「短歌ありて」胡月嬌、高淑慎/「台湾歌壇万歳」(郭文良)「短歌に励む」(陳秀鳳)/「敷島の道」(陳皆竹)/「短歌を心の杖に」(曾昭烈)「歌を友として」(顔雲鴻)/「和歌に生き抜く」(游細幼)

短歌が日々の生活の一部になっていることが伺える「くさぐさの歌」「短歌ありて」「歌を友として」、短歌を人生とする「短歌に励む」「敷島の道」「和歌に生き抜く」、歌壇というコミュニティーに属することの悦びを示す「歌壇万歳」。標題のなかに「くさぐさ」「ありて」「友として」という言葉が用いられており、会員にとって作歌という行為が日常の中にあるべきものという態度が伺える標題である。また、「短歌を心の杖に」「和歌に生き抜く」のように人生の支えや生き方の問題として短歌を位置付ける生活の一部なのか人生そのものなのかという親疎はあるが、ここには先に紹介した呉建堂の、異国の文芸である短歌を命の限り詠み継ごうという意識を継承した作歌態度の表出がみられる。

もう一つの特徴として、短歌を詠むという行為そのものが歌のテーマとなっている。そこには、生きる気力、老い、歌友、歌会、精神的支柱が大きな主題として詠まれる。

6 日本語を持て謳歌する万葉の短歌詠み継ぐ老いの我らは
(呉戀雲「第 26 号」p53 詠草「生き抜きゆかむ」2017 年 7 月)

7 ときめきの若き記憶を嘆かむも老い美しく短歌詠みゆかむ
(游細幼「第 27 号」p53 十二首詠「ことばの種」2017 年 7 月)

8 漸くにとりとめし命歌ある故生きらるる我ひたすらはげむ
(陳淑媛 2015 年 11 月歌会詠草「第 25 号」p134 所収)

臺灣大學圖書館期刊資料庫

9　高齢の友の身思ひ歌会の存続憂ふ杖をつきつつ

（鄭埌耀 2020 年 5 月南部歌会詠草「第 33 号」p102 所収）

10　年重ね白寿近きの年となり心身弱れど作歌続けたり

（荘淑貞 2020 年 10 月歌会詠草「第 33 号」p93 所収）

これらの短歌には「日本の文芸の短歌を命の支えとして生きる」という文学的決意が表明されている。6「万葉の歌詠み継ぐ」「老いの我らは」、7「老い美しく短歌詠みゆかむ」、8「歌ある故に生きらるる」などの表現は、前掲の呉建堂主宰が「万葉の流れこの地に留めむと生命のかぎり短歌詠みゆかむ」と詠ったように、歌を詠み継ぐ意思、歌を続ける意思の表現は、台湾歌壇の基本精神の継承を示す表現である。9「高齢の友の身」「歌会の存続憂ふ」の語句から分かるように、短歌を詠んでいく行為が、老いた自分や会に集う会員の存在の生きる気力を支えとなっていると歌う。10 は「心身弱れど作歌続けたり」とあり、白寿近き老いによる身体的衰えを自覚しながらも、なお作歌を続けんとする意志を詠み込む。7，8 の歌を同じく短歌という存在が生きる支えであり、短歌という文芸と共に生きる文学的決意だろう。ここに表現されている詠者の表現や行動は日本語を選び取って文芸活動を行った台湾歌壇が達成した文芸的成果の表れでもある。

これらの短歌をより精確に読み解くために、歌壇の会員の日本語で吸収したもの、短歌以外の日本語に注目してみる。

台湾歌壇の呉建堂主宰は、短歌を作るために短歌以外のジャンルに目を配ることを推奨している。

呉建堂主宰は生前「主催から或会員へ」として、15 項目に亘る短歌創作の心得を書き記し、会員全体に配ったことがあるという。その書面を鄭埌耀（元台湾歌壇代表・南部歌会世話人）が保存しており、2021 年に現在の会員へ伝えてほしいと、その手紙が事務局に届けられた。鄭埌耀の手元の残っていた心得の第⑬項目に以下のような文言を見ることができる。

⑬短歌の本は申すに及ばず、他のジャンルの単行本、雑誌、新

臺灣人學學術期刊資料庫

聞などを広く拾い読むのは、歌材の選択のプラスになります。また、俗語、諺言、方言などの利用もたまにはいいが、過度に陥らぬように。また前述のように演歌の類はマンネリ化した言葉が多いが、その一部を絶対に挿入していけないわけではありません。

呉建堂主宰が会員たちに多ジャンルの日本語を吸収することを奨励したことから考えて、短歌の中に引用された本・音楽・歌・映画などを見ることは決して無駄とは言えないだろう。台湾歌壇の詠者が何を受容して歌の栄養にしている様子を大まかにでも歌の世界と関わらせて考えることで、「台湾歌壇」の歌の本質的なものがつかめるのではなかろうか。[15]

これらの歌が生み出された背景には文学文化の受容があり、大まかに次のように分類できる。

古典文学（百人一首、人麻呂、芭蕉「笈日記」）、本（啄木歌集、台湾紀行）、音楽（蘇州夜曲、りんごの歌、青い山脈など映画音楽や新旧の流行歌・童謡・軍歌）、テレビ映画（朝ドラ、ニュース等）世界の名作や名曲（アルトハイデルベルグ・椿姫）台湾の流行歌（望春風　雨夜花）その他（教育勅語　御製）

まだ印象に過ぎないが、これらは記憶を蘇らせる要素として位置づけられる。

【Ｉ歌（童謡・唱歌・流行歌・軍歌）】

1 幼な頃***「さくらさくら」***と唄ひしが老いたる今も未だ忘れず

（林碧宮「第 24 号」十二首詠 p71「ひ孫の笑顔」2016 年 1 月）

2 若き日の我が歌う童謡なつかしむ娘と声合わせて***「可愛い魚屋さん」***

（林聿修「第 27 号」十二首詠 p56「蔡代表を偲ぶ会」2018 年 7 月）

3***「故郷」***を聞くたび浮かぶ蔡代表しんみり唄ふ「清き水」の表

[15] 「台湾歌壇」第 34 集に収録。「或る会員」は未詳。また、鄭氏がこの書面を受け取った時期も未詳。だが、歌壇のかなり早い時期だと思われる。なおその後の書誌調査で、同文のものが「台北歌壇」117 輯（1996 年 5 月 1 日）p.128-131 に掲載されていることが明らかになったので記しておく。

情

（陳秀鳳「第 28 号」十二首詠 p31「われ病みぬ」2019 年 7 月）

4 喜びと希望に燃えて唄ひたる***「乙女の首途（かどで）」***の昭和遥けし

（林百合「第 24 号」十二首詠 p72「過去をたぐりて」2016 年 1 月）

5 ***「旅の夜風」***共に歌ひし同窓会眠れぬ夜に亡き友偲ぶ

（江槐邨「第 29 号」十二首詠 p14「騒騒しき世に活きる」2019 年 1 月）

6 ヒット作の***「愛染かつら」***の走馬灯タイムマシンに乗りたき心地

（陳瑞卿「第 27 号」p37　十二首詠「紅葉饗宴のバンクーバー」2018 年 1 月）

9 日本にて今この歌がと新婚の夫に教はる***「リンゴの唄」***を

（高淑慎「第 24 号」p18 十二首詠「十年一束」2016 年 1 月）

【Ⅱ本】

11 幼き日***「小熊コロスケ」***の絵本見しは太平なりし昭和初期頃

（高淑慎「第 29 号」十二首詠「あの日あの頃」2019 年 1 月）

12 下校すれば***「ノラクロ伍長」***を読む兄が話してくれた爆弾三銃士

（高淑慎「第 29 号」p15 十二首詠「あの日あの頃」2019 年 1 月）

13 ***啄木の歌集***読みて暗記せしセーラー服の大連の日よ

（高淑慎「第 29 号」p15 十二首詠「あの日あの頃」2019 年 1 月）

14 今も尚心老いざり***啄木やハイネ、ゲーテの詩***と共に活く

（蘇楠榮「第 24 号」p35 十二首詠「くさぐさの歌」（その二）2016 年 1 月）

15 ***トルストイの「復活」***の本貸しくれし友は戦時中十九で逝きたり

（高淑慎「第 29 号」p15 十二首詠「あの日あの頃」2019 年 1 月）

16 黒髪にリボンを付けし頃ありて***「若きヴェルテルの悩み」***を読みき

（高寶雪「第 26 号」[16]p63 詠草「しみじみと読む」2017 年 4 月）

[16] 『台湾歌壇』「第 26 集」は、歌壇創立五十周年記念号であるため、会員は通常号ならば十二首の出詠だが、この号だけは二十首の出詠をしている。

臺灣人文研究期刊資料庫

17 月見の庭ハーモニカ吹く姉に合わせ次兄（あに）と月の砂漠歌ひし十代
（林聿修「第 26 号」p196 詠草「しみじみと読む」2017 年 4 月）

18 眠れ得ず***ハイデルベルグの小説***の詩の湧き返る脳は苦しも
（蘇楠榮「第 24 号」p35 十二首詠「くさぐさの歌」（その二）2016 年 1 月）

19 司馬遼の「街道をゆく」をふところに日本列島幾度巡りぬ
（陳皆竹「第 26 号」p122　詠草「古き歌集を繙けば」2016 年 1 月）

20 漸くに日本書籍の解禁され「台湾紀行」などを兄の送り来ぬ
（高淑慎「第 29 号」p15 十二首詠「あの日あの頃」2019 年 1 月）

詠歌の中の本を見ると、19、20 にあげた司馬遼太郎「街道をゆく」「台湾紀行」を除き、啄木、ゲーテ、ハイデルベルグなど旧制高校生・女学生的な教養を示している。同時に、これらの本が、I歌の部分で挙げたのと同じように、過去を思い出すよすがとしてある。14 の歌では、若き日に読んだゲーテやハイネを今の自分が再読するという姿を詠んだものであるが、過去のゲーテ、ハイネの読書経験への回想が「今も尚心老いざり」という第一句第二句で、今の自分の中にもなおも青年期と同じく瑞々しい心が存在するのを気づかせる。15 の歌は、若くして亡くなった友人を思い出すよすがとして「トルストイの「復活」」があり、16 は、今は老齢になった自分に「黒髪にリボンを付けし頃」の少女時代があったという、思い出を象る象徴として「若きヴェルテルの悩み」が用いられる。17 も同じく自らの十代を想起する縁としての月夜と童謡「月の砂漠」が詠み込まれている。18 は、若き日とは書かれていないが、眠れないままに「ハイデルベルグの小説」をよみ、若き日のように、思い出で締め付けられる夜をすごした様子を詠じたものではないか。過去の青春の痛々しい感情の反復が現代の感情に重ねられている。台湾歌壇の会員の中に詠み込まれる文芸は、記憶を呼び覚ますトリガーとして機能し、若い頃の思い出を反芻させる。そして、今現在の詠者の生きる人生の時間を照射していく。過去を語る表現方法としても確立されている。

臺灣大學圖書館期刊資料庫

また、歌は人生のある時期や人を思い出すきっかけとする。1 は「さくらさくら」を歌った記憶を「老いたる今も未だ忘れず」という表現によって、記憶の反芻を行う。また 2 は、娘に懐かしがられている「可愛い魚屋さん」が若き日の詠者自身を想起させるものとしてある。3 は「故郷」の歌が蔡焜燦元代表の故郷であった台中の「清水」であることから、蔡元代表が好んでいたという会員たちの共通の思い出を語ることによって、故蔡元代表を思い起こす歌となる。5、6、9 は大流行した映画の主題歌が詠み込まれているが、これもある時期やある人を思い起こさせるものとして詠み込まれている。5 の「旅の夜風」（6 の「愛染かつら」の主題歌）は「亡き友偲ぶ」ものであり、6 では「愛染かつら」を思い出すことによって、その映画を観て音楽を聴いた時期を「タイムマシンに乗りたき心地」と表現して回顧する。過去の人や時間を振り返り懐かしむものである。4 では「乙女の首途（かどで）」が時代の変化を測るものとして詠み込まれる。またその歌は、「過去をたぐりて」という題によってまとめられた歌の一首としてあり、過去の記憶を手繰り寄せる状態を示す表現方法として選ばれ、取り上げられた歌や本は、日本語を知る人の共同の記憶を引き出す表現の効果がある。

まさに、歌は過去の人や記憶をたぐりよせる。

ここにあげた範囲においては、詠歌の中に引用された歌・本は、二つの役割がある。一つは、会員自身が自らの日本語を形成したもの、もう一つは記憶を蘇らせる要素となるものである。この現象は台湾歌壇の歌の文芸性との可能性を示唆している。台湾歌壇の現在の歌の文芸性とは以下の二つと言えるだろう。

①歌によって生きるという創作態度。

②記憶の整理。

これまで歌を通して示してきたように、「詠歌」は「人生の時間の経過（あるいは「老い」）」を詠み、自己の存在証明になっている。台湾歌壇の歌は、時間と共に自己存在を明確にする詠歌としてある。そして、存在を証明する記憶をクリアに輪郭づけるものとして、日

臺灣大學學術期刊資料庫

本文学・文化の受容をみていくべきだろう。

またこれは台湾歌壇の台湾人会員が、「日本語」を選び取って行う文芸活動の意味の一つの可能性を示している。現在の歌壇における歌の文芸性の一つは、記憶の整理という点で一つの意味をもつものと言ってよい。「詠歌」の題材となった本や音楽が、過去を思い出させるトリガーとなる構造を持つ。この詠じ方によって「人生の時間の経過（あるいは「老い」）」を詠み、題材とした本や音楽の中によって引き出された詠者自身に積み重ねられた時間をあぶり出し検討する。この行為によって、詠歌をする現時点での自分が、自己の存在証明している。自分に積み重ねられてきた台湾歌壇の文芸性としての一つの達成であろう。「老い」を語るということは、ともすれば消極的な表現行為としてとらえられがちである。だが、これまで挙げた詠歌の中から見るように、その語り方は、自分の記憶を整理する形で、自分の人生と向かい合い、前掲 6～10 の歌のように、歌を詠むために命を繋げようとする生の姿が詠み込まれている。

歌を詠む行為と題材となる本や音楽は、存在を証明する記憶をクリアに輪郭づけるものとしてあり、台湾歌壇の歌には、日本文学・文化の受容をみていくべきだろう。受容の痕跡を丁寧に読み取っていくことで、台湾において短歌という文学の形式表現したものを知ることができる。同時に、日本語、日本文学のみが語りえるものの可能性も考えることができるよう。

四、終わりに

台湾歌壇の短歌は、たしかに皇民化教育という歴史がなければ存在していない。だが、出発点は皇民化によって与えられた言語であったにしても、あえて日本語を選び取り、日本の文芸形式を選び取って短歌を作っているという点は考えておく必要がある。短歌という文芸形式を用い、自らの生活や人生を詠むことによって、文学的作品を作ろうとしている意志は、現在の台湾歌壇を考えるうえでおろそかには出来ないことである。また、短歌という文芸を好み、み

臺灣大學學術期刊資料庫

ずからを短歌という文芸を生み出すものだと位置づける文学に対する態度は、戦後生まれの台湾人会員にも引き継がれている。

「台湾歌壇」第 26 号となる創立 50 周年記念特集号には、作品を寄せた会員の簡単な自己紹介がある。そこには日本語世代ではない、戦後生まれの台湾人会員の歌に対する態度が次のように書かれている。

> 演歌をきっかけとして、日本語を習い、敷島の道を歩き始めた初心者です。
>
> (小島依草(江孟庭)「第 26 号」p54　詠草「草山時雨」自己紹介　2017 年 7 月)

とある。小島依草は 30 代の会員であるが、敷島の道を進むという意識を持つ。敷島の道意識は、三で紹介した短歌に対する日本語世代の台湾人会員の意識を引き継ぐものだろう。また、勤務先でたまたま歌壇会員であった三宅教子の歌壇の紹介と短歌についての講演を聞いて作歌を始めた 30 代の会員[17]は、短歌の形式に魅せられたことが作歌へのきっかけだったと述べる。

> ある日、三十一文字に構築される世界に出会って次第に魅了された。
>
> (イスタダ・アリーマン「第 26 号」p20　詠草「キミの目に映る世界、僕は旅をする」自己紹介　2017 年 7 月)

短歌そのものへの興味という点では、戦後生まれの台湾人会員によって次のような語られ方もしている。

> 戦後生まれ。現在日本語教師。台日現代短歌の小さな架け橋になりたいという夢を抱き台湾歌壇で精進。短歌の美しさに心酔、「歌心と歌の境地」で日本人に負けないように頑張りたい。戦後生まれの台湾人に短歌を知ってほしい(郭文良「第 26 号」p38　詠草「心振り向く」自己紹介　2017 年 7 月)

> 二〇〇七年の七月頃詩や短歌に心惹かれてしまいました。二〇

[17] 三宅教子氏からの直話。

臺灣大學學術期刊資料庫

一〇年から「香る園」という短歌会に入って勉強し始めました。短歌を書くのは魂で感じるような魂が養われ、人生観や価値観がより洗練されたものになると思います。（藍淑娥「第 26 号」p182　詠草「春待つけはひ」自己紹介　2017 年 7 月）

本論では詠歌としては出てこなかったが、戦後の世代の歌の中からも歌や本を詠み込む表現を見ていくことで、台湾歌壇の中で発展した短歌形式が持つ本質が見えてくる。また、これは、本論で述べた台湾歌壇の歌の①歌によって生きるという創作態度、②記憶の整理をするという特徴をより精確に考察する手がかりとなろう。

呉建堂主宰はこの地で消えゆく運命にある日本語によって生きるという決意をもち、消えゆくものとして詠歌を行った。短歌が消えゆくものである可能性は否定しない。だが、台湾歌壇の歌で見てきたように、短歌という文芸形式に魅力を感じ、自分の人生の時間記録し語るための文芸活動として歌壇の歌が詠まれていることを考えると、消えゆく日本語と生きるという呉主宰が見た未来とはやや異なった次元で短歌という文芸は生きていくのではないか。

【付記】本稿は 2021 年創新国際学術検討会において口頭発表したものに、加筆修正を行ったものである。席上、貴重なご意見、ご教授を下さった方々には心よりのお礼を申し上げます。また加筆修正にあたり、科技部補助専題研究計画（計画番号 MOST111-2410-H-030-076）の補助を受けた。

【参考文献】

【単行本】

孤蓬万里編（1994）『台湾万葉集』集英社

フェイ・阮・クリーマン著　林ゆう子訳（2007）『大日本帝国のクレオール』慶應義塾大学出版会

臺灣大學學術期刊資料庫

【雑誌論文】

磯田一雄（2013）「植民地教育史と台湾歌人」『天理台湾学報』第 22 号、p1-34、天理台湾学会

河路由佳（2000）「日本統治下の台湾における日本語教育と短歌―孤蓬万里編著『台湾万葉集』の考察」『人間と社会』第 11 号、p.47-64、東京農工大学

孤蓬萬里（1993）「台湾の短歌の近況について」『ふぉるもさ』1993 年春季号、p.42-47、台湾文化研究会

臺灣大學學術期刊資料庫